

岡本太郎(1911～1996)の児童画に対する要求水準について

——『児童画評価シリーズ2』を手掛かりに——

金山 愛奈*・向野 康江**

(2016年10月28日受理)

Taro Okamoto's Standards for Evaluating Pictures Painted by Children:
Focus on Valuation of Child Paintings Series 2

Aina KANEYAMA and Yasue KOHNO

キーワード: 岡本太郎, 児童画, 民間美術教育運動, 美術教育

岡本太郎は戦後日本で活躍し、絵画作品を発表することとまらず芸術家として多方面で活躍した。岡本の今日的意義について明らかにするために、本稿執筆者は教育分野の視点から再評価を試みている。本研究では、1958年刊行された『児童画評価シリーズ2』について分析を行い、岡本の発言を他者と比較をすることで、児童画に対する要求水準を明らかにすることを試みた。同著の執筆者は民間美術教育運動に関わりがある、7人(井手則雄、岡本太郎、久保貞次郎、国分一太郎、竹内清、藤沢典明、山形寛)で構成されている。彼らが3枚ずつ選んだ合計21枚の児童画を分析し、岡本が選んだ児童画を中心に考察を行った。岡本が求めている児童画の姿は、自由な精神が解放されているかどうかという点にあったことがわかる。このような複眼的な方法によって、現代の学校教育でも児童画の評価に芸術家や教育者などの様々な考え方を反映させることで、美術教育の改善を導き出す可能性がある。また、『今日の芸術』より「子どもの絵」で岡本が主張していた良い絵の具体例を確認することができた。

はじめに

芸術家・岡本太郎(以下、岡本と略)の美術教育活動に児童画の審査がある。岡本の著書『今日の芸術』には、子どもの絵に対する考え方がまとめられており、良い絵の基準を主張している。しかし、実際にどのような作品を指すのかについては記されていない。本稿執筆者は別稿で、岡本が民間美

*茨城大学大学院教育学研究科教科教育専攻美術専修 **茨城大学教育学部

術教育運動の一つである「造形教育センター」に参加していた事実を明らかにした1)。本研究でと
り上げる『児童画評価シリーズ2』(黎明書房)の出版年が1958年であることから、造形教育センタ
ーへの参加後である、1950年代後半の民間美術教育運動が高まる時期にあたる。本研究では、岡本
が実際に参加していた児童画評価を中心に考察を行い、児童画審査のあり方について考えを深める
ことを目的としている。

春原史寛(2015)は、岡本と久保貞次郎との関連から『児童画評価シリーズ2』を取り上げている。
しかし、同書が民間美術教育運動におけるメンバーで構成されていたことにまで言及していない。
また、熊本高工(1988)は同書より、一部の児童画(図8)について5人の見解を紹介していた。さらに
同書の「児童画の評価の変遷」において「児童画の評価は、教育目標によってかわってくる。また
それぞれの時代を反映する。お手本によって模写をさせていた時代の評価は簡単であった。お手本
をいかに似ているかということを見ればよかったからである。子どもの絵が子どもの思想感情の表
現でなければならないということになると、評価はたいへん難しくなる」と述べている。ゆえに、
岡本の児童画の審査について考え方を明らかにし、岡本の評価の特徴を見出したい。児童画の評価
に正解がなくとも良いという曖昧さについて、様々な立場の見解を通して岡本の児童画評価を明確
化すれば、今日の児童画評価の理解が深まるかもしれない。

1 児童画の審査に対する考察

1-1 1958年『児童評価シリーズ2』の概要

岡本が芸術家としての活動の傍ら児童画の審査に参加していたことについて、岡本敏子(2005)が
「9 子どもスピリッツ」より「子どもの絵が好きだった 人生は積み減らし 若者と真剣に向き合
った」と紹介している。岡本は自分自身の子どもの時代の経験を主張することが多く、子どもの絵に
関心をもち続けていた。久保貞次郎・小磯良平・宗像誠也が監修した『児童画評価シリーズ2』は
岡本を含め、当時の児童画に対する見解について詳細な評価が記録されている貴重な文献である。
刊行された1958年は、既に執筆者が岡本太郎と民間美術教育運動の関わりによって明らかにした
1955年「造形教育センター」への参加後のことであり、評価者の一人に選ばれた理由であると考え
られる。岡本の教育に対する考え方は著書で示されることが多く、児童画の審査は晩年まで続いた。
また、1985年に制作されたモニュメント「こどもの樹」があるように、岡本にとって「子ども」は
興味関心があるテーマであった。

とくに、戦後は児童画の理解が高まる時代である。教育者だけでなく芸術家に重要視されるよう
になり、研究が進められた。誰でも自由に表現することが時代背景も影響を与えているといえる。
従って、研究が盛んな時期でもあったことから、『児童画評価シリーズ2』における「執筆者7名」
は、芸術家を含めた多方面で当時活躍していたメンバー(井手則雄、岡本太郎、久保貞次郎、国分
一太郎、竹内清、藤沢典明、山形寛)で構成されている。民間美術教育運動の推進者が多く参加し
ていることから、それぞれの特徴を後で紹介する。「はじめに」によれば、児童画評価の問題が起き
ていることに対し、「児童画評価の焦点」を明らかにし、客観的に捉えることが刊行の目的であった
ことがわかる。全3巻構成のうち、岡本が参加していたシリーズは、「第2巻(小学校三、四、五学

年編)にあたる。従って、本研究によって明らかにできるのは、小学校中学年から高学年の児童画になる。この時期の発達段階については、ローウェンフェルド(1963)によれば「写実的傾向の芽生えーギャング・エイジ(9才より11才まで)」にあたる。ギャング・エイジの特徴の一つは「社会的独立」を見いだす時期である点である。『児童画評価シリーズ』の評価者である竹内清が翻訳者として参加していたため参考にした。特に、小学4年生は、発達心理学的にみても大きく違いが現れる時期であることから、精神的に変化がある時期に岡本が参加していたことは興味深い。

本書の評価の方法については「各巻の編集概要」で次のようにある。

一、特定の立場や見解に比重のかかることを避け、現場の先生方、美術教育家、評論家、心理学者、教育学者、画家など、幅広く御執筆をお願いし、各巻七人ずつ参加していただく。二、各氏とも、まず「評価」に対する御自身の基本的見解を端的にのべていただく。三、つぎに担当学年の作品より、それぞれ”よい絵”と判断されるものを一点ずつ、御便宜の方法により適宜御入手提出していただく。この場合、中には、人によって評価がかなりちがうのではないかと予想される特徴的な作品で、しかし御自分は是とせられるものを特に御選定いただいていることもある。四、各巻二十一枚の児童画の原色版校正刷を作成し、淮が、どの絵をえらんだものかは、わからないようにして各執筆者におとどけする。各氏は、自己の評価基準に照らし、それぞれの絵を評価していただく。五、別に、当該児童の指導者をお願いし、参考資料として、その子どものプロフィールをえがいていただく。これは、性別、作品題名以外、各執筆者には原則として御覧いただかない。(p.1 f.)

以上のように、7人のメンバーがそれぞれの見解を示していることについて、評価に対する正解を追及するために刊行されていないことがわかる。敢えて考え方を統一しないことが特徴の一つであり、様々な考え方を得ることで今後の美術教育に役立つことが期待されていた。同書が今日まで行われなかった取り組みであるとして、21枚の絵の子ども一人ひとりについて「1学年・性別2生育歴3学業成績4家庭環境」を紹介している²⁾。当時学校で子どもの能力をはかるために行われていた、知能検査による知能指数の記載もある。佐藤達哉(1997)によれば「IQの定式 $IQ(\text{知能指数}) = \text{精神年齢} / \text{実際の年齢} \times 100$ 」であり、「その人の実年齢(生活年齢とも言う)と精神年齢(知能検査によって確定)を知らないとIQは知ることができな」と述べられている。知能指数をはかるためには、日ごろの様子を良く知る教師の存在が必要であることがわかる。以上のように、『児童画評価シリーズ2』は専門家による児童画の評価と教師の見解が同時に組み込まれているため、最先端の取り組みを活かした方法で行われていた。

1-2 『児童画評価シリーズ2』の執筆者7名

執筆者7名について概要を記す。岡本は1954年に設立した現代芸術研究所の交流をはじめ、様々な活動を行っていたため面識があったメンバーもいる。久保がその一人であり、藤沢も関わりがあった。現在でも著書が残る有名な専門家が多いことから、『児童画評価シリーズ2』は実験的な取り組みであったといえる。また、民間美術教育運動についてわかることは、戦前からの自由主義的な考えの延長として設立された創造美育協会における「創造主義」とは対照的な活動として、新しい絵の会が「認識主義」、造形教育センターは「近代主義」が強い側面として活動していたとまとめる

ことができる。創美は自由であるけれども明確な方法がないこと、良い絵と悪い絵を区別することに対して批判がなされた。その他の団体は、当時の社会背景である機能主義的な生産性重視の合理主義の基盤の上に成り立ち、図画工作・美術教育に反映された。1958年の学習指導要領を見れば、創造美育協会による精神解放、造形教育センターによる「デザイン」の導入が成果として取り入れられている。しかし、教育で求められるのは、合理主義的な考え方ではなく、子どもの感性を豊かにすることであるため、非合理的な側面も含まれる。岡本の発言も同様で、自由に対する意識が強いことが児童画の評価からわかる。以下、執筆者7名(以下、五十音順)による「児童画評価に対する基本的見解」を整理した。実際の評価に対する指標を確認することができる。

1人目は、井手則雄である。二科会、美術文化協会を経て新しい画の会に参加していた。「芸術的評価」と「教育的評価」に対して、同著にあたる後者を「たしか教育理念がなければ印象評価になってしまう」点について危惧しており、「評価するモノサシ」についてまとめている。「まず第一はその絵が、本当に子どもが何かを身につける努力にみちているかということ」「第二にぼくら大人側にある『子どもらしさ』という概念にもたれかかるような甘ったれた態度が、子どもの側につくられていないかどうか」「第三はまた第二と同様『子どもらしい明るさ』とか『伸びやかさ』とかいう実質のない概念に甘えて、乱雑になったり、嘘の明るさをわざと作ったりしていないか」「第四に、したがって子どもが自分の生活のまわりをよく観察し、現実とのからみあい子どもなりに精一杯表現されているか、あるいは投げやりになっているか」である。児童画評価の視点は、4点のなかに「子どもらしさ」というキーワードが目立つことから、絵の中に子どもらしい表現が表出している絵を評価している。(p.4 f.参考)

2人目は、岡本太郎である。二科会、造形教育センターに参加していた。「絵を描くこと—それは評価されるのが目的ではない。この原則は大人の場合も子どもの場合も同じことだ。自分のうちにあるものを外に投げ出す。本能的な表現欲、その衝動が、いかに自由に、直接のあふれ出し、定着されるか。というのが根本だ」と述べてから、児童画の見方を示している。

まず第一に評価するという考え方をしないことつまり、子どもと同じ気持になるということである。そして『描きたいから描いたんだ』というものかどうかをみる。出来ばえではない。私かつねにいつていることだが、すぐれた児童画であることの証しは、子どもが、いかに自由であるかというその分量にある。(p.5.)

そして、「教え、教えられる平等な同化作用—先生と生徒との間に自然に心がかよい合う人間同士の立場」の必要性を指摘している。児童画評価の視点は、特に子どもと同じ視点でみることを重要視しており、自由が表出されているかを一番にしていた。(pp.5-7.参考)

3人目は、久保貞次郎である。創造美育協会の設立者であった。子どもの絵をみるとき、次の3つの点を考慮している。「一、主題の内容 二、感情 {a 内容 b デリカシー 三、緊密度} 一は、「対象への観察によって生まれてくるものである」二のaは、「子どもの絵としては、明るい感情の方が暗い感情よりも望ましい。病的な感情の表現された絵には、高い評価を与えるわけにはいかない。なぜなら、子どもは成長するものであり、成長するものはつねに健康であらねばならぬ」二のbは、「デリカシーの度が高ければ高いほど優れていると評価すべきである」三は、「子どもが創作するとき、どれほど心をその仕事に集中したかを示すバロメーターである。しかもその心の集中度こそ、子どもの絵の評価の上でいちばん大せつな要素である」加えて、「積極的な現実との摩擦こそ

子どもを創造的にし、個性的にするものである」と述べている。児童画評価の視点は、特に緊密度を重視しており、子どもの集中度を一番大切な要素としている。(p.8.参考)

4人目は、国分一太郎である。生活綴方教育運動の推進者であった。「一、その絵の描き手の表現が察知できるか」「二、表現の意図が、見るものの目に、よく伝わってくるか」「三、描きたいこと＝対象(これには自然の事物もあれば人間・社会の事物もある)と描き手のとっくみあいの度が緊密かどうか」「四、表現の上に個性が出ているかどうか」「五、表現技法に新しいものが加わった場合、それが既成の絵画からの悪い影響としてあらわれているのか、おとなや子ども仲間の描いた絵からのよい影響としてあらわれているのかを吟味する」「六、子供の全生活の進行、学習活動の振興と絵の表現が、どんな関連をもっているかに気をつけて評価していく」「七、最後に、どんな場合でも同じことだが、ひとりひとりの個人的な発達によく目を見はって、ていねいな評価を加えていく」としており、現場の教師が子どもに対して信頼と尊敬をもつ必要があるとまとめている。児童画の視点は、7点にまとめられている。子どもの表現がいかん伝わってくるのかを重要視しており、さらに評価者は子どもの個人的な発達に気づくべきだとしている。(pp.9-11.参考)

5人目は、竹内清である。心理学者であり、ローウェンフェルドの著書に携る人物であった。「児童画の評価」について、「芸術としての美術と、教育としての感情表現とは直接の関係はない」として「個別的教育評価(1)図工科の授業の結果として得られた作品を評価する場合」と「一般的教育(芸術)評価(2)授業には関係なく、一般的な立場から評価する場合」について違いを明らかにしている。同著の評価は(2)にならざるを得ないとして、「(1)その学年の標準的発達段階の特徴との一致度 (2)異常傾向の有無」を基準としていた。児童画の視点は、他の6名とは異なる見方を示しているのが特徴的であり、良い・悪いについてっきりとした見解をせず、心理学的立場から発達段階に即して詳しく分析している。(p.11f.参考)

6人目は、藤沢典明である。教諭、二科会、創造美育、造形教育センター、文部省委員会で活躍していた。「1. 児童画に数多く接する機会を持つこと」「2. 感情が率直にあらわれていること」のなかで「良い絵は、臆病では駄目だ。自信をもち、喜びをもった絵でもある。自由でのびのびしている」としている。「3. 緊張感のみなぎっていること」「4. 健康で明るく内容は豊かであること」である。児童画の視点は、よい児童画を選ぶ条件を4点にまとめている。見る側の態度を意識し、児童画に対しては子供らしい表現に着目している。(p.13f.参考)

7人目は、山形寛である。教諭を経て文部省で活躍していた。「評価の仕方」の場合分けと、今回の「児童画分析の意味」についてまとめている。「1 日々の学習において一教師の側からは指導一学習目標に照らして、学習の結果を評価する場合」「2 指導要録や通信簿に記入する5・4・3・2・1等の品等をつける評価」「3 展覧会などの審査」のような評価である。共通点は主観的である点であり「児童画の評価には客観的の基準」がないとしている。また、評価者に「高い評価力」の必要性を求めている。児童画を見るポイントについては、「作品を見たときに、その作品から子どもの地肌といますか、子どものあるがままの姿」で「迫力のあるなし、誠実さのあるなし」が評価基準になると述べている。児童画の視点は、評価のそれぞれの場合に着目している。今回の児童画分析は、教育活動などの「直接的な関係」に対して展覧会の審査を「間接的関係」として評価している。(p.15f.参考)

以上のように、それぞれの見解を抽出し、岡本と比較した場合、文面上では似たような部分があ

るがその違いは曖昧である³⁾。この点は、各々がその当時の美術教育による見解や哲学者の考え方を取り入れ、独自の見解を形成していたと推察する。

1-3 『児童画評価シリーズ2』の分析結果

執筆者7名が良いとする3枚の絵を選んだ結果、合計21枚の絵について一人一人見解を加えている。本稿執筆者は(表1)を参考にして、岡本を中心にその他のメンバーの評価水準を分析した。それぞれの見解で見られる考え方やキーワードを参考に(表2)を作成している。

表1:本稿執筆者による五段階別にみた評価水準(評価基準)

	5点	4点	3点	2点	1点
五段階別にみた 評価水準	よい絵、ダメな ところがない	良い絵だが、改 善点がある	良い部分とダメ な部分があるか どちらでもない	よくないがいい 部分を取り上げ ている	全くダメな絵

表2:本稿執筆者による五段階別にみた評価水準(分析結果)⁴⁾

	岡本太郎	井手則雄	久保貞次郎	国分一太郎	竹内清	藤沢典明	山形寛
1(図11)	3	3	4	2	2	5	4
2(図19)	1	4	1	3	3	3	2
3(図1)	5	5	3	5	2	2	5
4(図2)	5	2	3	2	2	4	2
5(図6)	4	1	1	2	3	3	5
6(図15)	2	3	1	3	2	1	2
7(図16)	2	2	2	3	5	5	3
8(図7)	4	5	2	2	3	4	4
9(図3)	5	1	1	1	1	2	1
10(図17)	2	2	2	2	5	4	5
11(図8)	4	4	1	4	4	5	4
12(図12)	3	4	2	3	5	5	2
13(図13)	3	3	5	2	2	4	4
14(図20)	1	4	2	4	4	4	5
15(図9)	4	4	2	4	5	5	5
16(図4)	5	4	1	4	5	4	3
17(図5)	5	4	2	3	2	2	3
18(図18)	2	3	5	2	4	5	4
19(図21)	1	4	3	4	1	4	2
20(図14)	3	5	3	2	4	5	4
21(図10)	4	4	3	4	3	3	4

(表2)は分析結果である。横列に1マス分色分けしている箇所は、児童画を選んだ人物を示している。全体からわかることは、岡本と全く意見が一致する人物がいないことである。また、岡本が選んだ3枚以外にも、良い評価をしている児童画がある。評価者によって選ばれた作品であるにもかかわらず評価が分かれることから、それぞれの考え方によって選定される作品が異なることも確認できる。また、岡本の造形教育センターの関わりをふまえ、7人のメンバーが集められている条件が、仲間同士ではなく立場や考え方が違う者同士で構成されていたといえる。岡本の主張は、教育者ではなく、芸術家・岡本の視点によるものであるという点に着目したい。このように、段階別

に分類して他の評価者と比較することで、それぞれが求める良い絵・悪い絵が明らかになる。

2 五段階別にみた評価水準に対する考察

それぞれの絵について、本稿執筆者が分類した児童画を図と共に紹介し、良い絵・悪い絵の基準を明らかにする。表題には、執筆者の率直な意見が込められているため比較しやすいことから、児童画を選んだ人物と岡本の表題を示してある⁵⁾。以下、岡本による評価を中心に考察を行なった。

2-1 岡本太郎の良い絵(5点・4点)



図1「道路工事 小学3年男」



図2「宇宙たんけん 小学3年男」



図3「悲しい時 小学4年・女」



図4「すずめ 小学5年・男」



図5「みなと 小学5年・男」

5点の絵について、岡本が選んだ絵が2枚含まれている。図1選・国分「積極的な表現意欲」に対して、岡本は「生活的なモチーフが生き生きしている」、図2選・岡本「絵画的処理に成功」、図3選・岡本「第一位の作品」、図4選・竹内「正しい写実的態度の好例」に対して、岡本は「色調・構図ともしっかりした観察画」、図5選・山形「伸びる可能性をもった絵」に対して岡本は、「あまり見事で、心配なくらい」とな

る。以上のように、良い評価に対して、岡本が主張する自由が感じられる絵が多い。また、直感的な部分だけでなく、図4や図5のように発達段階を意識した見解を確認することが出来る。生活画、想画、写生画がそれぞれ含まれている。



図6「馬 小学3年・女」



図7「ごしゅうぎのもちくれ 小学4年女」



図8「向島のドック 小学4年・男」



図9「働く人 小学5年・女」



図10「自転車屋 小学5年・男」

4点の絵について、岡本の選んだ絵が1枚含まれる。図6選・山形「心ひかれる楽しさ」に対して、岡本は「一種の完璧さをもった絵」、図7選・井手「生活実感がすばらしい」に対して、岡本は「印象の強い絵」、図8選・藤沢「整理された色、大胆な構図、誠実な努力」に対して、岡本は「四年生としては大したもの」、図9選・藤沢「繊細で神経のゆきとどいた作品」に対して、岡本は「デリケートな美しさ」、図10選・岡本「絵画的に成功

した機械類の描き方」となる。以上のように、比較的良い部分を取り上げている。岡本が主張する良い絵に近づくために必要な条件を加えているため、到達度が極めて高い児童画が多い。

岡本の良い絵のキーワードは「素朴でたくましい」「力強い」「構図が良い」「完ぺき」「立派」「精神的」「色が良い」「非常に美しい」「非のうちどころがない」などがある。

2-2 岡本太郎の中間の絵(3点)

3点の絵について、岡本は良い部分と悪い部分の両方の観点から評価を行っている。全体的に見ると後者の見解が多い。図11選・久保「上の部の作品」に対して、岡本は「達者にまとめた絵」、図12選・竹内「ギャング・エイジの正常な絵」に対して、岡本は「まずまずの絵」、図13選・久保「自由を求めろ力にみちた最高の絵」に対して、岡本は「あまり買えない絵」、図14選・井手「新しい日本の児童画のスタイル」に対して、岡本は「人間が描けていない」となる。以上のように、岡本の評価は選択した人物とはほとんど異なる見解をもっていることがわかる。2点、1点の児童画についても同様のことがいえる。すなわち、岡本の主張があまり表現に表れていない児童画となる。そこでは、作品の特徴をとり上げて改善点を述べる以外に、教師の授業態度について意見している場合が多い。岡本が学校の授業に対して批判的であったこともわかる。

岡本の中間の絵のキーワードは「まずまず」「特徴もない」「面白くない」「単調なもの」などがある。



図11 「物語より 小学3年・男」

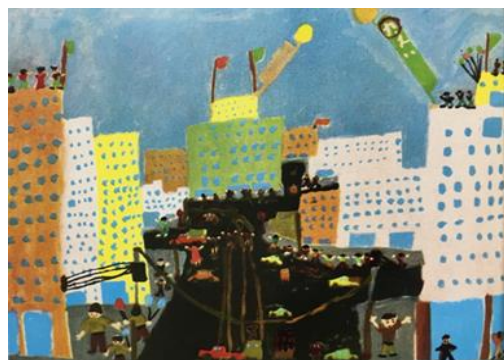


図12 「街頭風景 小学4年・男」

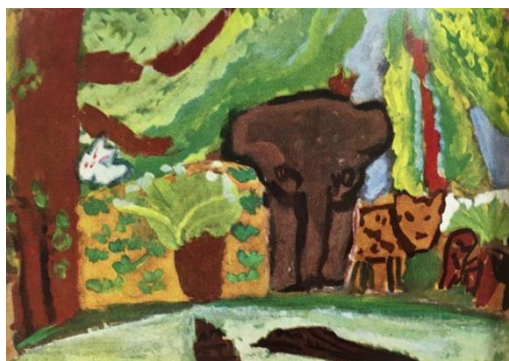


図13 「象 小学4年・男」

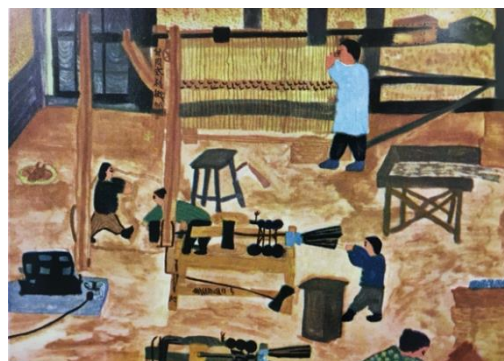


図14 「なわつくり 小学5年・男」

2-3 岡本太郎の認めない絵(2点・1点)

2点の絵について、図15選・竹内「自己表現になっていない」に対して、岡本は「うまさに頼りきった絵」図16選・藤沢「新鮮で誠実な作品」に対して、岡本は「いささかマニア的」図17選・山形「誠実さの滲み出た絵」に対して、岡本は「とりえのない絵」図18選・久保「率直、自

然、誠実さのあらわれた絵」に対して、岡本は「とり立てていうことのない絵」になる。以上のように、3点以上の絵に比べ岡本はさらに批判的である。1点の絵と異なるのは、ダメな絵と断定していない。その代わりに、改善点を取り上げている。



図15「おまつり 小学3年・女」



図16「神社 小学3年・男」



図17「工事中 小学4年・男」

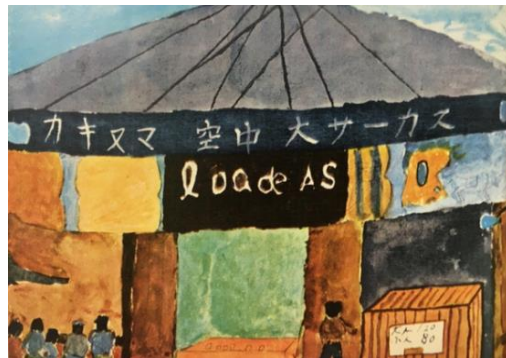


図18「サーカス 小学5年・男」

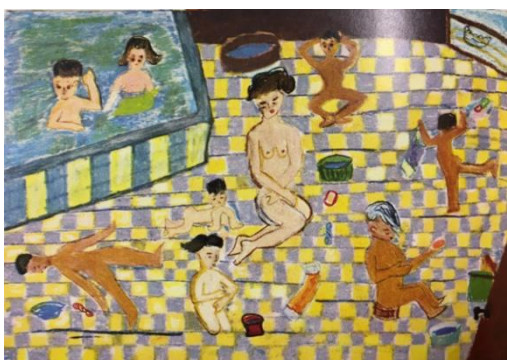


図19「入浴 小学3年・女」



図20「栗ひろい 小学4年・女」

1点の絵について、図19選・井手「都会的な良い絵」に対して、岡本は「全然認めない」、図20選・国分「誠実な努力に共感」に対して、岡本によれば「小器用でつまらない」図21選・国分「実感のこもった絵」に対して、岡本は「ちゃっかりした絵のつまらなさ」になる。以上のように、岡本は、批判的で全然認めておらず、執筆者の見解が半分以下の児童画が含まれていた(図20)。また、(図17)は左右対称シンメトリーであり、(図19)は男女で色が区別されている。概念的な絵に対して批判的であったといえる。岡本の認めない絵のキーワードは「つまらない」「全体が同じ調子」「あ

まり買えない」「ただうまく描いている」「とりたてていうことのない」「心得た」「概念にもたれて」などがある。

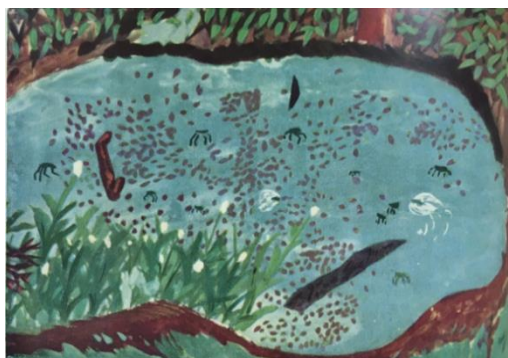


図 21 「山の沼 小学5年・男」

ここで、児童画における「性差」という観点に注目したい。児童画における性差の研究者である、皆本二三江(1993)は「幼児の造形活動に表出する価値観」「1. 男児のばあい」で岡本を取り上げている。皆本は岡本の「闘争の美」に対する主張を紹介し、男児の絵の特徴と関連付けて「闘争する性」について説明していた。確かに岡本の作品にも見られるように、大胆な構図や色使いには男の子らしい力強さが現われている。岡本の性差への意識については、児童画の審査より次の2枚を比較すること

で明らかである。前者は、(図9参照)岡本「小器用でつまらない」後者は、(図20参照)岡本「デリケートな美しさ」とある。2枚の絵は、女の子の絵である。岡本によれば、前者は「ただ、うまく描いてあるというだけでつまらない感じがする」「全体のとらえ方は非常に模様のだが、これは女の子に共通の傾向であろう」である。後者は「色も美しいし、構図も成功しているよい絵である。一見して、女の子の絵だと思った。やはり男では描けない感覚である」と正反対の見解を示している。確かに、両者ともに娘の絵である。だが、前者の児童がある一点の目線から人物を観察しているのに対して、後者は描かれている視点が広く行動範囲が広いことから男児らしい。力強い線で描かれているのも同じことがいえる。このように、惜しむらくは、岡本は性差について評価の視点では述べていなかったものの、無意識に児童画の審査に反映されていたことがわかるので、この時点で岡本が性差を意識した評価をしていたならば、皆本を満足させたのかもしれない。

3 岡本太郎が選んだ児童画に対する考察

表題より、岡本の選んだ3枚の絵に共通するのは、「絵画的」という言葉が繰り返されている点である。岡本が選んだ3枚について、本稿執筆者の考察を踏まえ詳しくみていく。

3-1 1枚目「宇宙たんけん」 選・岡本太郎 小学3年男(図2参照)

指導者・五十嵐光昭は「第二学期の始めに『楽しい夢』という題材で描かせたもので、絵本や映画などの模倣にならないように気をつけ、自分が現在一番興味を持っている、楽しい世界を自由に想像して、形や色を工夫しながら表現したもの。大変楽しく学習した一枚である」(p.32.)と記す。

7人の見解はそれぞれ、岡本「絵画的処理に成功」井手「現実から遮断された空想」久保「自己制御されない爆発的情熱」国分「ほんとうの自由表現ではない」竹内「退行的な夢の世界」藤沢「一気にかいた空想の世界」山形「裸でぶつかってくる感銘がない」である。岡本と似ている考え方は久保・藤沢であり、「絵に情熱がある」点が一致する。以下、岡本の言葉を引用する。

これは、はじめから”宇宙たんけん“という主題を、かなり明確につかんで表現している。こ

の絵の成功は色彩の美しさにある。それから一つ一つの描かれた対象の処理が、偶然ではなくて、しっかりとらえられている。つまりモチーフがハッキリしているということだ。この色の調子と配合—原色を生かすと同時に中間的な色を巧みに配合している。また、いろいろなものの配置も非常に成功している。“宇宙たんけん”の幻想性といったものも、よく出ていると思う。いまの子どもたちは、昔の子どもが桃太郎の鬼が島征伐にいたいたと同じような幻想を“宇宙たんけん”にもっている。それでいて大人とはちがって、かなり強く現実的に生きているイメージでもある。そういうものが、不思議な魅力と、子どもなりのイマジネーションの範囲で、精密に描かれているということは、ちょっと驚くべきものだと思う。もちろん、これには新聞雑誌、ラジオ、テレビ等の影響があり、全部が全部、独創的なものだというわけではない。いわば共通してもっている宇宙ではあるが、そうしたイマジネーションを絵画的に処理したということで非常に成功している。ストロークも力強いし、構図もよい。(p.25.)

図2は、小学3年生の発達段階としては形式的表現期かつカタログ的表現期であり、描き方が少し幼いように感じられる。しかし、カラフルな色使いは、男の子の作品らしい激しさが表現されており、全体的に生き生きとしている。また、「宇宙たんけん」という非日常を描くいわゆる想画で、線の強さや色の強さ、また全体的を余すことなく描かれており、子ども自身が描きたい世界観をもちながら授業に望み努力している姿を想像できる。そういった点で、なかなか自由がうまく表現されない学校現場における子どもの絵であるにもかかわらず、自由が残る作品であるため岡本は良い評価をしたと考察できる。

3-2 2枚目「悲しい時」 選・岡本太郎 小学4年女(図3参照)

岡本が一番高く評価していても他の6人はそうではなく、岡本と6名が全く一致した考えがない絵である。『児童画評価シリーズ2』のなかで一番良い絵であると評価している。従って、岡本独自の主張がこの一枚から読み取れる。指導者・五十嵐光昭は次のように記している。

自画像、たゞ外形のみの写生にならないよう、いろいろな物に写し、自分の気持も顔に表すよう観察させた。この絵は空罐に写して写生させたもので、大の仲良しの級友が、栃木県に転校してしまったのでさびしく、罐の顔も平で悲しい顔をしているのにびっくり、いろいろな色をまぜて、頭、顔、洋服と描いていたら、いっそう悲しい顔になってしまった。最後に、頭や顔の形があまりへんなので、おかしくなってしまったそうである。(p.72.)

7人の見解はそれぞれ、岡本「第一位の作品」井手「触覚的な典型」久保「心のこもらない絵」国分「教育としての不健康さ」竹内「教育的意義のない絵」藤沢「賛成できない画法」山形「下の部類の作品」である。以下、岡本の言葉を引用する。

子どもというとにかく常識的な明るい画ばかり考えられやすいが、実は嬉々として遊んでいる子どもたちの楽しそうな表情のなかにも、意外に暗く悲しい気持がひそんでいるものだ。だから果たして、この子が、この絵のような悲しい顔をして、悲しい気持で描いたものかどうか—そうかも知れないが、案外、心の奥深く無意識にひそんでいる子どもの切なさ、悲しさといったものが、この子自身も気がつかずに出てきたのではないかと思う。“悲しい時”という題は、後で自分の描いたものを見て、つまり描いた顔が非常に悲しそうな顔だったから勝手につけた

のではないだろうか。子どもの絵のなかには、そういういろいろと矛盾した要素が、いつでもあるということを知らなければならない。子どもが、絵としての充実感とか画面の処理とかを計算して描いているわけではない。それでいて、それは一つの緊張感をもって、非常に力強い表現となっている。色も美しい。構図も、大胆に顔をクローズ・アップしながら全体をくずしていない点、立派だと思う。とにかく今度見たうちでは、これが一番だ。(p.65.)

図3は、小学4年生の作品としては感情が直接作品に表現されているように感じられる。真ん中に主役である自分を堂々と描くことで、子ども自身の迷いが無い。また、色使いが濁っていて美しさが無いように思えるが、「悲しい」感情を示しているのも、むしろ成功しているように思える。構成については、濁っている顔の部分とは対照的に下部分が明るく、全体的にはバランスがとれているのも評価ポイントであった。小学校中学年であれば、教師の指導や発達段階上明るい色彩が目指され、児童の精神が制御される傾向にあるため、楽しい・嬉しいを描く傾向にある。しかし、この絵は何を描いても良いという自由な雰囲気が尊重されている。岡本もこの点に共感していた。

3-3 3枚目「自転車屋」 選・岡本太郎 小学5年男(図10参照)

指導者・西田藤次郎の授業内容は記載がない。観察画もしくは生活画と推察する。

7人の見解はそれぞれ、岡本「絵画的に成功した機械類の描き方」井手「実感のある個性的な絵」久保「エネルギーは強いが、感情が未整とん」国分「表現意欲は強いが、まだ研究不足」竹内「やはり表現態度の矛盾が問題」藤沢「優秀な絵だが、教育的には問題」山形「相当な力作だが、やや乱暴なのが惜しい」である。井手・久保・国分・藤沢・山形も同意見を示していた。以下、岡本の言葉を引用する。

観察が細かくゆきとどいていて、自転車とか、さまざまな道具類の描き方が絵画的に成功していながらも、なお実際に即して正確だ。普通はなかなかこうはいかない。機械類に忠実だと、絵画的にはつまらなくなるものだが、この絵にはそういう欠陥がない。これは一つの大きな才能だと思う。ただ人間の顔が正面の一つを除いては、全部一方を向いており、みんな同じ顔だということに問題がある。この子どもの場合も興味は人間よりも機械にある。スパナなんか、ほんとうにスパナらしく描いているし、ポンプだって、ちゃんとポンプらしい感じが出ている。一つ一つの陰影がある。これは、いわゆる写実といったものではなくて、メカニズムに対する興味なのだろう。それだけに顔が同じになっているということは惜しまれる。それが、この絵をずっと単調なものにしてしまってる。これは、ボクがえらんだものではあるが、そういう意味で必ずしも良い点をつけたわけではない。ただ、こういうどこの村や町にも見られる生活の場面を、このくらいいきいきとまとめて描き出したということは、なかなかいいんじゃないかと思っている。色はそれほど美しくはないが、全体の構図は成功。生活観はよく出ているが、芸術的感動からは、遠いものといえよう。(p.161.)

図10で岡本が指摘するのは、個性的な絵であることを認めながら不十分な部分があると言う点である。小学5年生の作品であるこの絵は、子どもの興味の対象が自転車であることが、描かれている人物の一人を除き全部右向きであることからわかる。自転車のパーツが細かく描かれているにもかかわらず、人の動きにはあまり注目していない。全体的に自転車や建物などを構成しながら色

彩にも配慮を加えながら描かれており、全体の構成が行き届いている点を評価ポイントにしていた。構図については、さらに背景が白いところが全体をスッキリさせている。顔の表情が全部同じなので、人物描写は得意ではないかもしれない。しかし、好きなものに対して、集中できる子どもである点が評価できる。子どもの興味・関心への積極的な態度が作品にあらわれたときの緊張感を確認できた。この絵に関しては、岡本の考察が他者と一番共通していた。想画は意見が分かれていたが、観察画もしくは生活画の児童画では、構成や色彩において他者と共通認識が見受けられる。

以上のように、岡本が選んだ児童画3枚からわかる事は、評価の視点で述べられている「自分のうちにあるものを外に投げ出す。本能的な表現欲、その衝動が、いかに自由に、直接あふれ出し、定着されるか。というのが根本だ」という点に重きを置いて審査を行っていた。民間美術教育運動における創美や新しい絵、造形教育センター等、各々の違いに加えて、教師や芸術家、心理学者などの立場の違いにおいても評価する児童画が異なるということが分かった。各々自由を強調するという点が共通でありながら、相互に異なる論評になるとを理解することで、美術科の評価について正解がない教科だけに難しいと認識されていることに対して、新しい視点を与えることになるであろう。芸術家の美術に対する考え方と教育者側にとっての美術科という両者の評価の仕方を知ること、教える側の教育意識に変化を与え、子どもに影響を及ぼす可能性が十分にあるということになる。本稿執筆者は、教育のための美術の意義についてさらに考えを深めていく必要性を感じた。

おわりに

本研究では、岡本の児童画の審査における実際について分析を行い、岡本の言葉の根拠を明らかにした。この点は、他者のメンバーによる評価基準と比較を行ったことによる。本稿執筆者は本研究の結論を以下の3点にまとめた。1つ、岡本太郎が選んでいるのは、性差が表れている絵であり、男性的な絵である。対照的な女兒の児童画に対する評価を比較することで明らかである。1954年『今日の芸術』で登場した女の子に対しても同じ見解を示していたことからわかる。2つ、岡本の芸術家としての考え方・姿勢が反映されている。つまり、岡本が芸術運動によって果たそうとした目的と児童画審査に対する考え方が同じということになる。3つ、岡本は教育において必要な評価を無視しており、批判的な立場である。美術教育に教える必要はないという考え方が示していた。最低限道具の使い方を教えさえすれば十分であるとも主張していた。この点は、岡本自身の経験から学校教育に批判的であり、子ども時代の経験が影響としてあらわれているといえる。岡本の考え方は認められる部分があるにもかかわらず批判されていた。現場の教師にとっては、現実的ではなかったことが、原因として考えられる。岡本自身の経験から、学校教育を見直すことは、岡本の考えを社会で一般化させるために必要であった。そのため、芸術家の活動に教育に関わる活動が含まれていたといえる。今後の課題は、岡本と関わりのある研究者の考え方と比較し、岡本思想について源流を追及することで、児童画についてさらに理解を深めることである。岡本の芸術活動と類似している造形教育の今日的意義についても検討していきたい。

さらに、岡本の児童画への考え方は、子どもに対する考え方にも通じる。現在の学校教育において参考になる部分が多い。それぞれの児童画の評価と現場の教師によると子どもの分析を比べると、

子どもの精神的な部分を作品から読み取っており、子どもの内面を的確に判断している考察が見受けられる。この点は、子どもの絵は家庭環境や成績といった子どもの実際を知る手段であることを明らかにしており、精神的な成長をみる手掛かりに成り得る。同様に、作品を知ることは芸術家の本質を知る重要な手がかりであることに裏付けされる。子どもの絵は大人にとって、個人という存在を知るための手段であることを示しているともいえる。だからこそ、児童画は教師にとって子どものメッセージに気付くための一つの手段として蔑ろにしてはならない。この点は、岡本も『今日の芸術』「より生徒に絵を教わる時間」で、教師の態度の度合いが高いのかそうでないかによって、子ども自身を受け入れることにも大きく関わると述べている。個性を尊重する態度は、指導者に委ねられているといえる。岡本の主張は、現在の教育現場における美術教育を再注目するための主張であったのである。つまり、児童・生徒における発達段階の成長過程に伴う他者との比較で生じる自己への無関心と決めつけるのではなく、教師側の積極的な態度を一番に考慮に入れて授業設定を行う必要がある。図画工作・美術はともに児童・生徒の精神の自由のために有効な時間であり、自由な時間であることを忘れてはならない。改めて、主役は制作している子どもたちであることを強調したい。自己の表出が十分に達成できる時間をもつことができれば、岡本の考え方に到達できるのも難しいことではないのかもしれない。

注

- 1)大学美術教育学会に投稿中の内容は、「拙稿：岡本太郎(1911～1996)の美術教育活動への参加—造形教育センターにおける活動を着眼点として—」である。
- 2) 久保貞次郎・小磯良平・宗像誠也監修、『児童画評価シリーズ2』(黎明書房、1958年)p.1f.「はじめに」を参考。
- 3) 久保他、同掲書、(黎明書房、1958年)pp.4-16.「児童画評価に対する基本的な観点」を参考。また、人物の略歴については巻末の「執筆者紹介」を参考。
- 4)5) 久保他、同掲書、(黎明書房、1958年)pp.1-168.「評価実際編」を参考。

引用文献

- 春原史寛. 2015. 「岡本太郎と美術教育に関する一考察—今日の芸術(1954年)と創造美育運動に注目して—」『美術教育学研究』47, pp.167-174,(大学美術教育学会).
- 久保貞次郎 小磯良平 宗像誠也監修. 1958. 『児童画評価シリーズ, 第2巻』,(黎明書房).
- 熊本高工. 1988. 『児童画の歴史』, p.266,(日本文教出版株式会社).
- 岡本敏子. 2005. 『岡本太郎遊ぶ心』, p.88,(講談社).
- ローウェンフェルド(訳)竹内清・堀ノ内敏・武井勝雄. 1963. 『美術による人間形成』, pp.237-241 参考,(黎明書房).
- 佐藤達哉. 1997. 『知能指数』, pp.28-31,(株式会社講談社).
- 皆本二三江. 1993. 「幼児の造形活動に表出する価値観—男児のばあい, 女児のばあい—」『大学美術教育学会誌』26, p.282,(大学美術教育学会).